

第69回 近畿学校保健学会



重症心身障害への理解：医療・福祉・教育を考える

会 期：令和4年6月18日

会 場：びわこ学園医療福祉センター野洲

会 長：高野知行（びわこ学園医療福祉センター野洲施設長）

主 催：近畿学校保健学会

後 援：滋賀県教育委員会

大津市教育委員会

滋賀県医師会

滋賀県歯科医師会

滋賀県薬剤師会

目 次

学会長挨拶	1
第69回近畿学校保健学会開催要項	2
参加マニュアル	3
プログラム（一般演題）	5
会長講演	7
基調講演	11
特別講演	15
一般演題	19
第69回近畿学校保健学会役員・後援	32
近畿学校保健学会 開催地・学会長	33

ご 挨拶

第69回近畿学校保健学会

学会長 高野知行

(びわこ学園医療福祉センター野洲)

第69回近畿学校保健学会をびわこ学園医療福祉センター野洲において開催させていただくにあたり、皆様に歓迎と感謝のご挨拶を申し上げます。

重症心身障害児という用語が正式に使われるようになったのは、1958年に開催された全国社会福祉大会が始まりです。この大会で、全国社会福祉協議会の中に「重症心身障害児対策委員会」の設置が決議され、重症心身障害児の呼称が決定されました。その後、重度の知的障害と肢体不自由を併せ持つ人たちの施設として、1961年には全国で初の重症心身障害児施設「島田療育園」が東京に、1963年には第2の重症児施設として「びわこ学園」が津市に開設されました。1966年の次官通達の中で重症心身障害児（者）という用語が初めて使われ、「身体的・精神的障害が重複し、かつ、それぞれの障害が重度である児童および満18歳以上の者」が施設入所の対象とされました。このように、「重症心身障害」という用語は医学的診断名ではありませんが、重度の肢体不自由と重度の知的障害を共有する病態像として広く用いられています。

重症心身障害を有する児童・生徒には多くの疾患原因が見られ、その重症度や合併症も様々です。このため、適切な教育を行うに際しては、医学的な基礎知識のみならず、個々の児童・生徒の病態を踏まえた上での指導・支援が求められます。一方、近年の福祉や人権意識の発展を背景に、これまで家庭で訪問教育を受けていた子どもたちへの学校教育環境が整いはじめ、特別支援学校に通う重度の障害を持つ生徒数にも増加傾向が見られています。このような、学校保健に関わる教育環境の変化を踏まえ、今第69回大会においては学会テーマを「**重症心身障害への理解：医療・福祉・教育を考える**」といたしました。

重症心身障害の医療・福祉の黎明期をになった滋賀県の地で、第69回近畿学校保健学会を開催させていただくにあたり、ご協力をいただきました滋賀県教育委員会、津市教育委員会、滋賀県医師会、滋賀県歯科医師会、滋賀県薬剤師会、滋賀医科大学小児科学教室同門会（童心会）、ならびに本学会の運営にご尽力いただきました社会福祉法人びわこ学園のスタッフの皆様方に厚く御礼申し上げます。

第69回近畿学校保健学会開催要項

【テーマ】 「重症心身障害への理解：医療・福祉・教育を考える」

【日時】 2022年6月18日（土） 9：00～15：10

【開催方法】 オンライン開催（びわこ学園医療福祉センター野洲よりライブ配信）

【参加】 6月9日（木）までに学会HPのフォームより事前に参加申込みを完了され、参加費を入金された方

時刻(予定)	開催内容(敬称略)	会場
9：00～	入室開始	
9：30～	オリエンテーション	
9：40～ 9：45	開会式	メイン会場
9：45～10：45	一般演題発表（発表10分，討議3分） ＜教育・医療＞ A-1～A-4 ＜生理・スポーツ＞ B-1～B-4 ＜新型コロナウイルス＞ C-1～C-3	A会場 B会場 C会場
10：45～11：30	会長講演 「発達期の脳障害と重症心身障害」 座長：大平 雅子（滋賀大学教育学部） 講師：高野 知行（びわこ学園医療福祉センター野洲）	メイン会場
11：30～12：30	休憩	
12：30～13：00	評議員会・総会	メイン会場
13：00～14：00	基調講演 「重症心身障害児者の支援～びわこ学園の実践から～」 座長：丸尾 良浩（滋賀医科大学小児科） 講師：山崎 正策（社会福祉法人びわこ学園）	メイン会場
14：00～15：00	特別講演 「子どもの権利を医療と福祉・教育を結び考える ～コロナ禍での子どもたち～」 座長：高野 知行 講師：武内 一（佛教大学社会福祉学部）	メイン会場
15：00～15：10	表彰式・閉会式	メイン会場

第69回近畿学校保健学会参加マニュアル

◆参加に当たって

- ① 事前にご自身がお持ちの端末に対応したZoomのアプリをインストールし、最新版バージョンにアップデートしておいてください。
- ② Zoomの使い方については、Zoomホームページや「聴講者向けZoomマニュアル」等を参考に確認してください。
- ③ Zoom入室後の進め方については、参加申込者に「招待URL」をメールで送る時に資料を添付します。
- ④ 本学会における講演・発表時の録画・録音・スクリーンショット等の記録は禁止とします。但し、オンライン学会におけるトラブル対応を考慮し、大会事務局で録画しますので予めご了承ください。

◆一般演題発表者リハーサル

- ① 一般演題発表者を対象にアプリの接続等に関するリハーサルを6月11日（土）10：00～12：00に行います。
- ② 一般演題発表者にはリハーサルの内容とリハーサル用URLを後日メールで送りますので、極力ご参加ください。
- ③ リハーサルが不要な方は事務局に連絡をお願いします。

◆当日の参加方法

- ① 参加申込者には6月13日（月）に講演集を発送する予定です。また同時にZoomの「招待URL」をメールで送る予定です。
- ② 当日はメール配信された「招待URL」をタップするか、ミーティングIDとミーティングパスワードを入力するかで参加ください。
ID・パスワードはいかなる場合も他者に教えたり共有したりしないでください。
- ③ 参加後はカメラとマイクが「オフ（ミュート）」になっているかを確認してください。「オン」になっている場合は「オフ」にしておいてください。（発表者・座長・演者は該当時間にはカメラ・マイクを「オン」にしてください。）
- ④ 参加者のZoom表示名は【琵琶湖太郎（琵琶湖大学）】のように「氏名」と「所属」情報を入力してください。（別紙「氏名の変更について」参照）なお、一般演題発表者や座長は【〔発表者〕琵琶湖花子（琵琶湖大学）】のように氏名の前に〔発表者〕〔座長〕を入力し表示名を変更してください。表示名は入室後も変更可能です。
- ⑤ 当日は9時から入室可能です。各自で接続やZoom設定の確認をお願いします。（9時30分から「オリエンテーション」を始めます。9時40分から「開会式」となります。）
- ⑥ 各会場の入退は自由です。

◆意見や質問の仕方

- ① 演者・座長への質問や一般演題発表の討議には「チャット」を使用します。意見や質問が

ある場合には「チャット」に『Q』を入力後、質問内容を簡潔に書き、座長からの指名をお待ちください。

- ② 指名された場合マイクを「オン」にして発言し、終わったら「オフ」に戻してください。

◆当日の学会開催中の連絡先

- ① 学会開催中の進捗状況の情報は近畿学校保健学会HPのTwitterより提供します。
- ② 第69回近畿学校保健学会事務局

e-mail : kinki.sha.69th@gmail.com

電話 : びわこ学園医療福祉センター野洲 (077-587-1144)

当日専用携帯 (090-8236-7291)

一般演題発表プログラム

A会場

<教育・医療> 9:45~10:45

座長 大川 尚子 (京都女子大学)

A-1 知的障害のある生徒のセクシュアリティに関する現状と学校教育の課題
—保健室における個別指導での高等部生徒の語りの分析より—

○鶴岡尚子

和歌山大学教育学部附属特別支援学校

A-2 外部講師による性教育を学校カリキュラムと関連付けるための方策

○森本雅子, 十川真由美, 西岡伸紀

兵庫教育大学大学院学校教育研究科

A-3 看護臨床実習終了後の、学生のメタ認知的活動について

○毛利春美¹⁾, 大西宏昭²⁾, 久保加代子²⁾, 竹原章雄²⁾, 森島研次²⁾

1) 畿央大学教育学部現代教育学科, 2) 関西女子短期大学養護保健学科

A-4 滋賀県における医療的ケア児を取り巻く教育場面での医療支援体制の実態に関するアンケート調査

○永江彰子, 藤田泰之, 口分田政夫

びわこ学園医療福祉センター草津

B会場

<生理・スポーツ> 9:45~10:45

座長 笠次 良爾 (奈良教育大学)

B-1 大学生を対象にした深呼吸による思考および気分の変化についての検討

○竹端佑介, 後和美朝

大阪国際大学

B-2 中学校運動部員の傷害防止に関わる意識, 取組, 及び運動器検診結果

○山本千津子¹⁾, 安川裕美²⁾, 西岡伸紀³⁾

1) 西宮市立鳴尾南中学校, 2) 西宮市立高須中学校,

3) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

B-3 高校生のスポーツ外傷・障害予防のための保健医療関係者との連携

○十川真由美, 森本雅子, 西岡伸紀

兵庫教育大学大学院学校教育研究科

B-4 高校生を対象としたスポーツ外傷・障害予防教育の評価

—知識・態度・行動の観点から—

○山本順子¹⁾，西岡伸紀²⁾

1) 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科， 2) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

C会場

<新型コロナウイルス> 9:45~10:30 座長 龍田 直子 (大津市健康保険部保健所)

C-1 新型コロナウイルス感染症における養護教諭の現状について

○地海和美

栗東市立大宝東小学校

C-2 コロナ禍における不登校児支援に関する予備的考察

—養護教諭のヒアリング調査を手がかりに—

○八木利津子

桃山学院教育大学

C-3 コロナ禍における非接触型レクリエーションの心理的効果

—大学対面授業での試み—

○高山昌子，竹端佑介，後和美朝

大阪国際大学

会 長 講 演

発達期の脳障害と重症心身障害

びわこ学園医療福祉センター野洲

高野 知行

講師紹介

<略歴>

1984年：滋賀医科大学卒業

1991年：滋賀医科大学小児科学講座助手

1994年：トロント小児病院神経病理部Research Fellow

1996年：滋賀医科大学小児科学講座助手復職

2004年：滋賀医科大学小児科学講座講師

2008年：滋賀医科大学小児科学講座准教授

2017年：びわこ学園医療福祉センター野洲施設長

<所属学会>

日本小児科学会，日本小児神経学会，日本てんかん学会，日本先天異常学会，日本小児保健学会，

日本重症心身障害学会，日本重症心身障害療育学会

<参考論文>

1. Takano T. Self-injury as a predominant challenging behavior in epilepsy: A study in a residential facility for profoundly disabled patients. Res Dev Disabil 120 (2022) 104149
2. Takano T, Hayashi A, Harada Y. Progression of motor disability in cerebral palsy: the role of concomitant epilepsy. Seizure 80: 81-85, 2020.
3. Takano T, Sawai C. Interneuron dysfunction in epilepsy: An experimental approach using immature brain insults to induce neuronal migration disorders. Epilepsy Res 156(2019) 106185.

発達期の脳障害と重症心身障害

びわこ学園医療福祉センター野洲

高野 知行

重度の障害を持つ児童・生徒に対する学校教育は、学校保健における大きなテーマの一つです。そして、適切な教育を行うに際しては脳障害についての十分な理解が求められます。

妊娠中や周産期、乳児期など、脳の発達期に障害を受けた場合、発現する代表的な神経症候として、脳性麻痺、知的障害、行動異常、てんかんの4つを挙げることができます。脳機能はネットワークを形成して発現していますので、脳障害によるこれらの症候も多くは互いに重なり合っ

て発現するという特徴があります。一方、重症心身障害児とは、福祉行政の用語として「重度の精神薄弱（知的障害）及び重度の肢体不自由が重複している児童」と定義されています。現在、重症心身障害者施設に入所されている方の多くは、冒頭に挙げた4つの症候（脳性麻痺、知的障害、行動異常、てんかん）のいくつかを重複して有している方々が大半です。さらに、これらの患者さんの多くは、発達期の脳障害に起因しているということが、多くの調査結果で報告されています。

重症心身障害の病態の特徴の一つは、非常に多くの合併症を伴う点が挙げられます。脳の障害そのものによる神経症状以外にも、運動器をはじめ呼吸、摂食、消化器、尿路、皮膚症状など、合併症は全身に及びます。障害要因となった脳障害そのものに対しては根本的な治療は困難ですが、合併症に対する対応を高めることで、QOLを大きく高めることが可能になります。

重度の障害を有する人たちが、通常の日常生活を送るために必要な医療的な生活援助行為を「医療的ケア」と呼んでいます。令和3年6月11日には「医療的ケア児支援法」が成立し、医療的ケアの必要な人達を家族とともに、社会全体で支えて行こうという基本理念が明確化されました。このような社会的背景を踏まえ、私たち学校保健に関わるスタッフも、今学会を契機に医療的ケアに対する理解をさらに深めていきたいと思えます。

基 調 講 演

重症心身障害児者の支援 ～びわこ学園の実践から～

社会福祉法人びわこ学園 理事長

山崎 正策

講師紹介

<略歴>

1975年：京都府立医科大学 医学部医学科 卒業

1978年：滋賀医科大学 小児科

1981年：滋賀医科大学 医学部大学院医学研究科

1985年：彦根中央病院 小児科

1986年：滋賀医科大学 小児科

1987年：国立療養所 紫香楽病院 小児科

1991年：近江八幡市民病院 小児科

1993年：重症心身障害児施設 第二びわこ学園 園長

2003年：社会福祉法人びわこ学園 理事長

重症心身障害児者の支援 ～びわこ学園の実践から～

社会福祉法人びわこ学園

山崎 正策

社会福祉法人びわこ学園は、昭和38年に滋賀県大津市で開設され、来年令和5年には創立60周年を迎えます。60年間重症心身障害という重度の身体障害と重度の知的障害を併せ持つ障害児者の支援を試行錯誤しながら続けてきました。そこには、当時未知の状態だった重症心身障害という障害についての理解から始まり、障害児者本人自身を理解して支援していこうという大きな努力の歩みがあります。

本日は、びわこ学園の支援の流れを振り返りながら、重い障害をもっておられる方々の理解と、彼らを支援する施設の姿勢について、皆さまと考えていきたいと思えます。

びわこ学園は知的障害児施設「近江学園」から育ち開設された施設です。近江学園は昭和21年に開設され、当時の近江学園園長であった故糸賀一雄先生は、戦災孤児や知的障害児を分け隔てなく受け入れ、共生生活のもと、教育訓練をしながら彼らを再度社会に送り返していくことを目指しておられました。また純真な心の持ち主である知的障害児から健全な社会的人間への育ちのあり方を学ぼうとされ、特に知的障害児の発達に着目し、発達の道行きを明確にしていこうとされていました。そしてそこで考え提唱されてきたのが、「発達保障」と「この子らを世の光に」という理念でした。

びわこ学園もこの理念を受け継ぎながら開設されますが、入所される方々は最重度の障害をもっておられる方が多く、開設当初は思っても見ない様々な出来事が発生し、途中で施設運営の窮地にたたされることもありました。初代園長の故岡崎英彦先生は開設当時のことを次ように述べられていました。「私たちはやはり、赤裸々な人間として、一つのいのちとして相対する以外にすべがないように感じます。この子どもたちも他の子どもたちと同様に全力で生きているのです。私たちも私たちなりに、全力で相対する努力なくしては、その子どもたちについていけないものを感じております。」

その後児童福祉法や施設運営基準の整備が進み、施設が全国的に展開されることとなります。そして重い障害児者のことが一般社会で理解されはじめ、養護学校への就学義務化も始まり、国際障害者年を契機として障害者の人権養護の動きが広まります。また障害福祉関係の動きとしても、ノーマライゼーション理念や国際障害分類の改訂版、国際生活機能分類の導入が進められて行きました。

しかしその間に、びわこ学園に入所しておられる方々も高齢化・重症化が進み、また新生児医療の下で重度の障害を持たれた方々の施設利用が増え、その中で、超重症児者と呼ばれる医療的ケアの必要な方々が増える等、現在重症児者支援の新たな局面に入りつつあります。

彼らの発達をどのように保障するかもまた大きな課題となってきましたが、人間発達について、認知の発達と関係性の発達の重要性が説かれつつある中、我々は、重い障害児者との共感や共鳴をもとにした信頼関係作りの大切さと同時に、彼らを取り巻く専門スタッフ間での、信頼とコミュニケーションを意識した関りの重要性を再確認し、これは障害を持っておられる方々から学んできたことですが、さらに実践を続けている所です。

特別講演

子どもの権利を医療と福祉・教育を結び考える — コロナ禍での子どもたち —

佛教大学社会福祉学部／ウメオ大学客員研究員

武内 一

講師紹介

<略歴>

1983年：滋賀医科大学卒業

1988年：重症心身障害児施設第一びわこ学園

1989年：耳原鳳病院小児科

1995年：国保内海（うちのみ）病院小児科（香川県小豆島）

1999年：耳原総合病院小児科

2009年：佛教大学社会福祉学部（現職）

2017年：ウメオ大学医学部疫学とグローバルヘルスユニット客員研究員（現職）

<学会活動>

現在、国際社会小児科学小児保健学会（ISSOP）電子会報編集員，すべての人への健康情報（HIFA）

日本代表，細菌性髄膜炎から子どもたちを守る会副代表

子どもの権利を医療と福祉・教育を結び考える — コロナ禍での子どもたち —

佛教大学社会福祉学部／ウメオ大学客員研究員

武内 一

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の子どもの影響はどう考えればいいのでしょうか？もう2年以上も前になりますが、2020年の1月に初めて陽性者が国内で出たものの、この年の2月は横浜に停泊していた豪華客船の中で感染が拡大するのを、何か他人事のように見ていました。その後、3月から3か月間、突然、学校閉鎖の依頼が政府から出され、子どもたちから学び、集い、遊ぶ、時間と場所が真っ先に奪われました。その後4月から緊急事態宣言が出され、経済活動への制約が加わりました。振り返ると、いわゆるアルファ株は子どもへの感染拡大は極めて限定的で、子どもを第一の犠牲者とした政策は誤りであったとわかりますが、子どもにしてみれば、反省して謝ってほしいはずの大人から、そんな思いに応えるメッセージはありません。

オミクロン株となり、ワクチン接種を受けていない12歳未満の子どもたち自身が感染の主体者となる状況に変化してきましたが、それでも子どもの死亡例は、その感染規模からみると、季節性のインフルエンザやRSウイルス感染症に比べるずいぶん少なく、重症化しにくいと言えます。これほどまで大きく報道され続けてきている一方で、障害や特別の事情がない多くの子どもたちにとってのCOVID-19は、感染症としての直接的影響がそれほど重大ではないと言い切ってよさそうです。

一方で、学び、集い、遊ぶ、時間と場所を奪われるという間接的な影響の大きさは、パンデミックが2年を超えて続いている状況を考えると、容易に想像できます。今回、コロナ禍を子どもたちはどんな思いで過ごしてきているのか、子どもたち自身の声を、子どもを支える取り組みに関わる大阪の子どもたちへのアンケートと医療機関ベースとした全国の子どもたちへの調査から拾い上げ、お伝えします。

そして、この45都道府県から回答が寄せられた全国調査から、このコロナ禍が子育て世代に何をもたらしたのかを、家族の在り方との関係から分析してご紹介し、医療・福祉・教育の現場でどのような視点を大事にして子どもに関わる必要があるのかを、少し掘り下げてみなさんと共に考えることができると思います。

一般演題発表

知的障害のある生徒のセクシュアリティに関する現状と学校教育の課題 — 保健室における個別指導での高等部生徒の語りの分析より —

鶴岡 尚子

和歌山大学教育学部附属特別支援学校

キーワード：知的障害特別支援学校，セクシュアリティ教育，養護教諭，個別指導

【目的】

本研究の目的は、包括的概念であるセクシュアリティをめぐって知的障害のある子どもたちが置かれた状況を把握し、特別支援学校でのセクシュアリティ教育構築に向けた示唆を得ることである。

ここでは、養護教諭である筆者が従来行ってきた個別指導の中で捉えた、高等部生徒たちのセクシュアリティをめぐる一側面について考察する。

【方法】

分析の対象としたのは、A特別支援学校高等部3年生Bさん（女性・A校に高等部から在籍）とCさん（男性・A校に中学部から在籍）である。いずれも知的障害の程度は軽度であり、2020年6月～10月にかけて、それぞれ10回程度の個別指導を行った。分析対象としてこの2名を取り上げたのは、性に関する知識が不足している実態が指導の過程で明らかとなり、その様子が、学校での性教育の課題を体現していると考えられたためである。分析に際しては、指導の過程で文字化して蓄積してきた生徒の語りの記録や指導の記録を用いた。そうすることで、生徒自身の経験を基にした語りから、個人が生きてきた過程や学校教育、生活環境も考慮に入れながら考察することができる考えたからである。

【結果】

Bさんはこれまで、友だち同士で性の話をすることはなく、セックスという言葉は知っているものの、「恥ずかしく、口にするものではない」という漠然としたイメージしか持っていなかった。Bさんは、公立中学校で理科や保健の授業を受けてきたため、「卵子」、「精子」、「受精」などの生殖に関わる言葉は記憶しているが、それらの関連性や、自分の存在との関わりについての認識はなかった。さらに、性感染症に関する学習の中で、その防ぎ方を問うと、「うがい手洗い、清潔にする」、「血を触らない」と答え、性感染症の主な感染経路である性交を含む性的接触についての発言はなかった。そこからは、Bさんには性交や性的接触の知識がないため、性感染症の感染経路やその防ぎ方を理解することに困難があったことが窺える。

Cさんも性交についての知識を全く持っていなかった。とりわけCさんについては、思春期の男性

にとっての大きな悩みの一つとされるマスターベーションをめぐる経験について取り上げる。CさんはA特別支援学校の中学部在籍中から、性の授業を受けてきた。そのため、筆者を含め教師たちは、Cさんがマスターベーションを知っているものと捉えていた。ところが、個別指導の中でCさんは、その言葉を「知らん」と言い、具体的に説明すると、「気持ち悪い。絶対しない」とのことであった。さらには、Cさんが自分の性器を不潔なもののみなし、触ることに嫌悪感を抱いていることも明らかになった。そのため、性交やマスターベーションを説明した当初は、「気持ち悪い」と度々発言していた。性器やセックスへの嫌悪感は、学習の最後まで変わることがなかった。性器への嫌悪感は、性の健康問題に関わるだけでなく、性の快楽の側面を楽しむことができないという問題にも繋がる。Cさんが嫌悪感を持つに至った明確な道筋は見出せなかったが、性器の洗い方を教えてもらったことがない、という趣旨の発言からは、幼少期に性器を清潔に保つための知識と習慣を身に付けてこなかったことが、性器への嫌悪感を固定してしまった可能性が示された。

【考察】

これらの事例から、学校における性教育がいかに抽象的で、生徒たちの“自然”な学びに頼っているかが浮き彫りになった。ここでは少なくとも、セックス、マスターベーション、性器の洗い方については“自然”に知識を得ることがなく、結果的に性的自己決定から遠ざけられている2名の生徒たちの実態が明らかとなった。本研究対象は極めて限定的であるが、実際の支援学校の生徒たちがもつ性の知識量、内容、関心の程度、価値観は多様である。今後も生徒たちのリアルな声を聞きながら、そこに隠れた潜在的ニーズや学校教育の課題の有無を問い続ける必要がある。そこから得られた示唆を活かし、学校は生徒たちの“自然”な学びに依拠せず、知的障害のある生徒が科学的知識と人権にそった性的自己決定ができるまでの、段階的で、具体的な性の学習を構築していく必要がある。方向性として、小学部から継続する、自己の体の権利、性と生殖の解剖学と生理学に関する知識やスキル、態度やポジティブな価値観を身につけることを目指した学習を検討したい。

外部講師による性教育を学校カリキュラムと関連付けるための方策

森本雅子, 十川真由美, 西岡伸紀
兵庫教育大学大学院学校教育研究科

キーワード：性教育, 中学校, 外部講師, 助産師, 教科間関連付け

【目的】

近年、若年者の人工妊娠中絶数は減少傾向にあるが、若年妊婦の出産数は減少していない。この中に、望まない妊娠をして出産に至ったケースがあると推測される。望まない妊娠防止のため、助産師等の専門職の外部講師が性教育を行うこともあるが、単発で終わることも多く、学習効果を持続させるのは難しいと思われる。そこで、外部講師の授業の内容の学びを、普通の授業と関連付けることで、効果が持続するのではないかと考えた。外部講師、学校におけるその方策を探るため、学校教員に面接調査を実施し検討した。

【方法】

中学校教員経験のある現職教員、現職大学院生4名に、個別に、1時間程度、半構造化面接を実施した。質問は、①性教育担当経験、②性教育への抵抗感、③外部講師による授業の参観、④外部講師による授業との関連、⑤外部講師との打ち合わせ、⑥助産師に望む内容、⑦SNSの影響の7項目で実施した。

【倫理的配慮】

対象者に、本研究の趣旨、インタビュー実施目的、学校及び個人が特定されない配慮のもとでデータ使用許可の了承を得た。

【結果】

対象者は、現職教員1名と現職大学院生3名である。内容については、②の性教育への抵抗感は、「どこまで踏み込んでいいか悩む」「若いころは抵抗感があったが、子どもを知ることで今は無い」、⑥の助産師に望むことは、「集中力の持たない子や、言葉での理解が難しい子がいるので具体物がある方が良い」「生徒自身のことだけでなく、周囲の人のサポートの視点も必要」、⑦SNSの影響については、「情報リテラシーを身につけてほしい」「大人に対してきつい言葉を使い、やり取りは出来ているつもりでも、相手の言うことがおかしいと判断出来ていないことに気づいていない」等の意見があった。その他の主要な結果については表1に示した。

【考察】

今回の調査で、保健体育科だけでなく、他教科を担当している教員からも、性教育と授業内容と絡めた内容について、命をどう扱うかという視点でつながりを持つことができるという意見があり、関連付けの必要性があると考えられる。今後はこの調査を基に、教科間の関連付けの具体的な方策や実施の可能性について、質問紙調査を実施する予定である。

表1 インタビューの主要な結果

	A氏	B氏	C氏	D氏
①性教育担当経験	無い。自分の担当科目でジェンダーが絡んでくる内容があったが、教科の視点から深入りしていない。	無い。	有り。学活で外部講師の授業の前に事前学習。自分の担当教科で、生物の生殖の話。	有り。担当教科が保健体育なので、第二次性徴や「性」は心の生き方という話をする。
③外部講師による性教育	性教育について、ずっと関係がある担任が話すのと全然違うと思うので、外部から来たプロの方にしっかり話してもらいたい。	保健師の授業は、専門の方が話すことで説得力がある。	学校では説明しない、実際にあった内容を話されるので勉強になったという意見あり。	他市での講演会を見たことがある。赤ちゃん人形を使用した命の教育。
④担当教科と性教育との関連	命をどう扱うかという意味で他教科や道徳・学活等とつながりは持てる。切り口をどうするか。	出前講座も単発で終わるので、系統づけるのはカリキュラムマネジメントとして良いのでは。	自分がやりたいのは、他の生物とヒトとの比較。生殖の利点とリスクを伝えることが出来たら。	講師の授業を受けて、それをふまえて道徳等様々な授業展開すれば意義があると思う。
⑤外部講師との打ち合わせ	総合担当の先生が実施。身内と死別した子、性的な衝動が抑えられない子等の情報を伝えて配慮してもらっている。	体育の女性教員が担当。養護教諭や学年の教員の関わりは無い。	養護教諭と学年主任、内容によつては生徒指導も入ることがある。	最近では、敏感な子がいるので、状況などを伝えて、気をつけてほしい言葉を伝える。

看護臨床実習終了後の、学生のメタ認知的活動について

毛利春美¹⁾、大西宏昭²⁾、久保加代子²⁾、竹原章雄²⁾、森島研次²⁾

1) 畿央大学、2) 関西女子短期大学

キーワード：養護教諭、看護臨床実習、メタ認知的活動

【目的】

病院実習を養護実習への前段階として位置づけるならば、ここでのメタ認知能力の育成は、養護教諭養成において重大な意味を持つと考えられる。学生および実習指導者の評価を分析することで得られた知見は、今後の学生指導に活かすことができると期待される。そこで、病院実習における評価を基に、学生のメタ認知的活動のプロセスを明らかにして、その発達過程を考察することを目的とする。

【方法】

1. 対象

平成30年度病院実習を終了し、養護教諭免許取得を希望したA短期大学養護保健学科2年生の39名。

2. 調査期間

平成31年4月1日から平成31年4月30日に面接を実施した。

3. 評価項目と評価方法

1) 学生による自己評価（以下、自己評価）

病院実習にどのような態度、気持ちで臨んだかを、評価基準9項目について、「十分できた」、「かなりできた」、「指導されたことができる」、「やや不十分」、「不十分」の5段階で評価し、それぞれ順に5, 4, 3, 2, 1ポイント付与した。

2) 実習指導者による実習評価（以下、実習評価）

実習病院の実習指導者は、評価基準10項目について、「十分できた」「指導されたことができる」「不十分」の3段階で評価し、それぞれ順に5, 3, 1ポイントを付与した。なおこの評価は、学生に関わった複数の指導者がそれぞれの話し合いの下で個々の学生を評価したものである。

4. 面接と分析

病院実習終了後、実習評価返却時に、「看護実習で学んだことから養護実習で活かしたいことは何か」について、学生1名に対し約10分の半構造化面接を行った。

データは文脈の意味を崩さないように簡潔な1文にしてコード化した。コードは、相違性、共通性を検討し、類似した意味内容をもつものをグループ化しサブカテゴリーとして分類を行った。

5. 倫理的な配慮

実施記録の本研究への利用については、対象者に

口頭及び文書で説明し、同意を得た。

【結果】

学生の自己評価の比較と、実習指導者による他者評価では学生の自己評価は高い傾向にあった。

実習評価を受けて、「養護実習で活かしたいこと」について個別面談を行い、内容を要因分析した結果、79のコードを抽出した。【教員としての資質強化】【実習生としての基本的態度】【自己の課題に取り組む】3つのカテゴリーにわけられた。

79のコードを三宮の概念図をもとに分類した結果、「人間の認知特性についての知識」としては、一般に社会で働くために必要なルールとしての＜社会人としてのマナーを身に着ける＞、「課題についての知識」は、養護教諭として身に着けておくべき知識として＜専門知識＞、「方略についての知識」は、＜実習日誌の内容を充実する＞とし、メタ認知的モニタリング＜実習評価(他者評価・自己評価)＞＜リフレクション＞に分類できた。メタ認知的コントロールは、次の実習に向けて取り組む課題＝目標の再設定として＜チームで協働する力＞＜コミュニケーションスキルを磨く＞が分類された。

メタ認知的活動の内容には《社会人としてのマナーを身につける》《専門知識》《実習日誌の内容を充実する》《実習評価》《リフレクション》《チームで協働する力》《コミュニケーションスキルを磨く》の7つが抽出され、養護実習に向けての動機づけとなっていた。

【考察】

今回の研究で、大学における学外実習は、メタ認知能力育成に影響を及ぼすことが分かった。

メタ認知の共有という視点で見れば、今回の実習では、＜社会人としてのマナーを身に着ける＞＜専門知識を増やすために勉強しよう＞、次の実習では、＜チームで協働する力＞や＜コミュニケーション＞を活用して積極的に取り組もうということであろう。大半の学生は共有できているが、共有できていない学生も存在する。このようにメタ認知を共有するためには、学生の「もう一人の自分」を育成することに、講義だけでなく、環境が大きく変化する学外実習は、学生のメタ認知育成に必要なものであることを再認識できた。

滋賀県における医療的ケア児を取り巻く教育場面での医療支援体制の実態に関するアンケート調査

永江彰子，藤田泰之，口分田政夫
びわこ学園医療福祉センター草津

キーワード：医療的ケア児，特別支援学校，医療と教育の連携

【目的】

近年の医療技術の進歩等を背景として，学校に在籍する医療的ケア児は年々増加するとともに，人工呼吸器等高度の医療的ケアを必要とする児童生徒が学校に通うようになるなど，医療的ケア児の必要とする支援体制や環境が，現在，大きく変わりつつある。このような現状を踏まえて，日本小児医療保健協議会合同委員会 重症心身障害児（者）・在宅医療委員会では，教育場面での医療支援体制の実態について，実施可能な県において調査をすることになった。また，滋賀県自立支援協議会としても，医療的ケア児支援の立場から，学校現場での支援体制の実態を把握しておくことは，滋賀県の施策を今後考える意味で重要なことと考え，アンケート調査に協力することになった。

【方法】

対象は，滋賀県特別支援学校の管理職，養護教諭を含む医療的ケアに関わる教職員，学校看護師および学校医であり，実施期間は2021年12月1～28日とした。アンケートは，1）各職種における医療的ケアに関する業務の実施状況，2）各職種における医療的ケアの業務に関する意見，および3）自由記載より成り，1）は文部科学省平成31年3月20日付「学校における医療的ケアの今後の対応について」を基に，2）3）は，上記委員会で検討された内容を基に作成された。このフォームを用いてアンケートを実施し，課題を抽出した。アンケート調査実施に関しては，びわこ学園医療福祉センター草津倫理委員会の承認を得た。

【結果】

回答学校数は4校，回答者数は88名（教育委員会1名，管理職12名，教職員49名，養護教員8名，学校看護師15名，学校医3名）であった。自由記載欄

のべ回答数は91であった。抽出された課題は，①医療と教育の連携，②登下校，③医療的ケア実施に関わる人的物質的環境整備，④学校看護師の業務の4点に集中しており，課題を具体化することができた。自由記載の意見も，ほぼ①～④に分類することができた。

【考察】

アンケート調査により学校現場での支援体制の実態を具体化し，課題を抽出することができた。「教育を優先させていい医療なのか，明確にしてほしい」とか，「学校は教育の場 医療的ケアの数は授業の合間に行える程度の子のみ通学を認めてほしい」といった医療と教育の概念に関わるものや，「医療的ケアの内容は年々増え，高度なものになっているが，働く環境は何もかわっていない」，「医療的ケアが複雑化し，より専門的な知識を持っている看護師でないと対応が困難な児童生徒が増えてきている」といった人的物質的資源の問題が背景にある等，解決困難なものが多い中で，「学校には，酸素も非常用電源もないことを主治医は知らず，病院と同じことを求められる」，「学校現場の状況を知ってほしい」といった，医療と教育間の双方向の簡単なコミュニケーションで解決しそうな課題も散見された。解決できそうな課題から一歩ずつ取り組む必要があると考える。

大学生を対象にした深呼吸による思考および気分の変化についての検討

竹端佑介, 後和美朝
大阪国際大学

キーワード：マインドワンダリング・深呼吸・気分

【目的】

近年の過度な情報は私たちの思考を休ませることなく、目の前の出来事に対して意識を集中させることも難しくさせている。このような今ある出来事から注意が逸れ、その出来事とは無関連に思考してしまう（服部・池田，2016）ことはマインドワンダリング（以下，MW）と言われている。MW状態の場合、今ここに注意が向け難くなるため、過度なMW状態は精神衛生上の問題を生じさせる可能性がある。現に、MWは抑うつや不安と関連するという指摘もあり（臼井他，2015），その傾向はより多くの情報を取り入れているであろう若者に多いことが予想される。そのため、著者らは若者のストレス緩和に対する手法のひとつとして、簡易な深呼吸を用いたストレスマネジメントの効果について模索してきた（ex. 竹端・後和，2021）。

本研究では、大学生を対象に深呼吸を実施することで、MWや気分に変化を及ぼすか検討を試みた。

【方法】

関西圏にあるA大学で調査協力に同意の得られた大学生37名（男性23名，女性14名； 18.7 ± 1.0 歳）を対象とした。2021年4月～7月までの計15回の講義開始前に、調査および深呼吸（計14回）を実施した。調査は集合法にて、①Mind-Wandering Questionnaire（Mrazek et al., 2013）日本語版（5件法，梶村・野村，2016）を用いてMWの状態（以下，MW得点）を調べるとともに、②服部・池田（2016）を参考に、深呼吸実施前後において、思い浮かんでくる考えを止めるような努力をしたかどうかについて著者らが作成した設問（5件法）より得点化した（以下，中断努力得点）。また、③二次元気分尺度（6件法，坂入他，2009）を用いて4つの気分を調べた（以下，気分得点）。①MWの調査は深呼吸導入前（第1回目の講義）と導入後（第15回目の講義）の計2回実施し、②思考の中断努力と、③気分の調査は深呼吸前後（第2回～第15回講義）に実施した。なお、今回の中断努力得点，気分得点については第2回目および第15回目の講義時の計2回の調査得点のみ用いた。

【結果】

1) MWの状態について

1回目のMW得点の平均値は、11.7（SD4.4）に対して、2回目の平均値は11.9（SD4.6）となり、

有意差はみられなかった（ $t(32) = 0.30$, $p = 0.77$ ）。

2) 中断努力について

深呼吸前後および第2回目と第15回目の講義と時間的な要因を加味した中断努力の変化について検討したところ、中断努力得点の平均値は第2回目の講義時の深呼吸前2.5（SD1.2），深呼吸後2.1（SD1.3）に対して、第15回目の講義時では深呼吸前1.9（SD1.2），深呼吸後2.4（SD1.4）となり、深呼吸前後や2回の時間的経過には有意差はみられなかったが、有意な交互作用がみられた（ $F(1, 31) = 7.48$, $p = 0.01$ ）。

3) 深呼吸前後の気分について

中断努力の変化の検討同様に、深呼吸前後および第2回目と第15回目の講義の時間的な要因を加味した気分の変化について検討したところ、活性度は第2回目の講義時の深呼吸前-1.7（SD3.8），深呼吸後-1.4（SD4.0）に対して、第15回目の講義時の深呼吸前-2.5（SD3.8），深呼吸後-2.0（SD5.1）となった。安定度は、第2回目の講義時の深呼吸前4.2（SD3.9），深呼吸後7.3（SD3.0）に対して、第15回目の講義時では深呼吸前4.2（SD3.8），深呼吸後5.1（SD4.0）となり、快適度は、第2回目の講義時の深呼吸前2.5（SD6.7），深呼吸後5.9（SD5.0）に対して、第15回目の講義時で深呼吸前1.7（SD5.0），深呼吸後3.0（SD6.0）となった。覚醒度は、第2回目の講義時の深呼吸前-5.8（SD4.0），深呼吸後-8.7（SD4.9）に対して、第15回目の講義時の深呼吸前-6.6（SD5.7），深呼吸後-7.1（SD6.9）となった。

すなわち、活性度以外の気分については時間的経過によって有意差がみられ（ $p < 0.01$ ），さらに、安定度（ $F(1, 31) = 19.46$, $p < 0.01$ ），快適度（ $F(1, 31) = 4.49$, $p = 0.04$ ），覚醒度（ $F(1, 31) = 10.81$, $p < 0.01$ ）においては、それぞれ有意な交互作用がみられた。

【考察】

今回実施した簡易な深呼吸は、MWを変化させなかったが、浮かんでくる思考を中断させる努力や気分を変化させることが分かった。特に、気分は第1回目の講義で始めて実施した深呼吸の方がその効果は大きいことが示唆され、深呼吸の導入の仕方や、それによる思考や気分への影響についてさらに検討する必要がある。

中学校運動部員の傷害防止に関わる意識,取組,及び運動器検診結果

山本千津子¹⁾, 安川裕美²⁾, 西岡伸紀³⁾

1) 西宮市立鳴尾南中学校, 2) 西宮市立高須中学校, 3) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

キーワード：傷害防止, 運動器検診項目, ストレッチ

【目的】

本研究では, 中学校運動部員を対象に, 傷害防止の方策を探るために, 傷害の経験と, 防止に関わる意識, ストレッチ等の取組状況, 運動器検診結果に対する自己評価等との関連性を明らかにした。

【方法】

A市立中学校(20校)運動部員1・2年生395人(男子207人, 女子188人)を対象として, 2021年9月～10月に質問紙調査を実施した。調査内容は, 学年, 性別, 傷害の回数, 生活習慣, ストレッチ, 準備体操, RICEに関する知識及び実施状況, 体のケア, 運動器6項目として, 4件法で行った。傷害の回数については2パターンに分け, ①ケガの有無:[ケガ無群] 0回, [ケガ有群] 1回以上, ②ケガの多少:[ケガ少群] 2回以下, [ケガ多群] 3回以上とした。

性別, 学年, 傷害回数と, ケガ防止の内容との関連性については, Mann-WhitneyのU検定を行った。また, 全質問項目を6内容「ストレッチ(重要性・実施状況)」「準備体操(重要性・実施状況)」「RICE(知識・実施状況)」「体のケア」「生活習慣(就寝時間・起床時間・朝食摂取)」「運動器検診項目(6項目)」に整理し, 各合計得点を算出し, 各合計得点間の関連性をSpearmanの順位相関係数により検討した。

【結果】

平均値では, ストレッチの重要性(3.45)および準備体操の重要性(3.53)は高く, 準備体操の実施状況(3.44)に比べて, ストレッチの実施状況(2.43)は低かった。

性差については, 準備体操の重要性, RICEの知識($P<.05$), 準備体操の実施状況, 片足立ち, シャガみこみ, 前屈($P<.01$)が女子の方が有意に高かった。就寝時間($P<.01$)は男子の方が有意に高かった。学年差については, 就寝時間($P<.01$)のみ1

年の方が有意に高かった。

ケガの有無との関連については, [ケガ無群]の方が朝食摂取は有意に高く($P<.05$), [ケガ有群]の方がストレッチ日数は有意に多く($P<.01$), RICEの知識, 体のケア($P<.05$)は, 有意に良好であった。ケガの多少との関連では, [ケガ少群]の方が朝食摂取頻度は有意に高く($P<.01$), [ケガ多群]の方がストレッチの重要性・実施状況, 体のケア($P<.01$), 準備体操の重要性, ストレッチ日数($P<.05$)は, 有意に良好であった。

6内容別の合計得点間の関連については, 「ストレッチと準備体操・体のケア: $\rho=0.365\sim0.445$ 」「準備体操とRICE・体のケア・生活習慣 $\rho=0.162\sim0.244$ 」「RICEと準備体操・体のケア・生活習慣 $\rho=0.147\sim0.235$ 」「RICEと体のケア $\rho=0.204$ 」にそれぞれ有意な相関($P<.01$)があった。「ストレッチと生活習慣 $\rho=0.128$ 」「運動器項目とストレッチ・RICE・体のケア $\rho=0.114\sim0.136$ 」に有意な相関($P<.05$)があった。いずれも, ストレッチ等の実施状況が良好であるほど, 傷害の経験が多く, 6内容間にはそれぞれ有意な相関があった。

【考察】

傷害の経験者や多い者の方がストレッチの実施状況等良好であったことから, 負傷時の保健指導の有効性が示唆されたが, 未経験者への防止教育の有効性が疑問視された。また6内容間の相関から総合的内容の指導の意義が示唆された。

本研究は, 西宮市立中学校教科等研究会養護教諭部会の研究を代表者として発表しました。部会の皆様に感謝申し上げます。

高校生のスポーツ外傷・障害予防のための保健医療関係者との連携

十川真由美, 森本雅子, 西岡伸紀
兵庫教育大学大学院学校教育研究科

キーワード：スポーツ外傷・障害予防, 連携, 保健医療関係者

【目的】

高校生における学校管理下の傷害の発生は、運動部活動に多く認められる。指導方法を十分に学んでいない学校教職員が指導していることも多いことから、指導や対応も十分でないと考えられる。そのため、スポーツ医科学の専門家との連携及び、選手自身の自己管理能力の育成を併せて実施しなければ、スポーツ外傷・障害の予防は困難と考えられる。

そこで本研究では、指導者及び運動部員に、スポーツ外傷・障害予防に必要である内容について実態と意識を明らかにすることとした。本報では、指導者対象調査結果を報告する。

【方法】

(1) 調査対象：2022年3月にA県内の高等学校（187校）に在籍する部活動指導者（バレーボール、バスケットボール、サッカー、ラグビー、アメリカンフットボール、野球）に調査を依頼し、研究協力校24校、協力部活動6種目部、85名から回答を得た。

(2) 調査内容：2021年12月にA県内のスポーツ整形外科医2名とスポーツに特化した鍼灸整骨院の院長2名に、医療機関から見た高校生のスポーツ外傷・障害の現状と予防・回復の方策についてインタビュー調査を実施し、その結果をもとに質問紙調査を作成した。内容は、①現在担当している部活動、②現在担当している部活動の指導経験、③自身の競技経験、④勤務校の種類、⑤スポーツ外傷・障害予防の必要性、⑥専門的知識を有する者の導入、⑦医療機関との連携とした。

分析は、IBM SPSS26を用い単純集計及び、指導競技種目、指導経験、競技経験との関連性を分析した。

【結果】

指導者の現在担当競技の経験は、大学生まで56名（65.9%）、高校14名・中学2名（合計18.9%）、経験なしが13名（15.3%）であった。スポーツ障害予防に必要な内容については、指導者の知識74名（87.1%）、トレーニングメニュー59名（69.4%）、部員の知識45名（52.9%）、年齢に応じた練習方法45名（52.9%）、専門的知識を有するAT・PTの導入42名（49.4%）、家庭との連携39名（45.9%）、リハビリの方法33名（38.8%）、適切な医療機関選び28名（32.9%）、医療機関との連携21名（29.4%）

となった。部員のコンデショニングを相談する必要性については、「強く感じている・感じている」は、59名（69.4%）であった。

また現在、AT・PTがすでに導入されている部活動は12部活（14.1%）と少ないが、「現在導入はされていないが今後導入を希望する」は39部活（52.7%）と半数が導入を希望している結果となった。

今後導入を希望する理由として、部活動内の安全管理24名（61.5%）、選手の体力向上23名（58.9%）、怪我への対応が不安17名（43.5%）、部員の技術力向上16名（41%）、という順となった。その他の意見として、「選手はどうしても近隣の医療機関を受診し「～と言われた」と曖昧なことしか言わない。医療機関の選定を行い競技復帰のリハビリをしてほしい」という意見もあった。

AT・PTを導入している12部活でATはどのような内容をAT・PTが担当しているかでは、トレーニングメニューの立案8名（66.6%）、練習や試合復帰までのトレーニングメニュー7名（58.3%）の順で多かった。

【考察】

スポーツ傷害に対する科学的な知識や医学的な対処法、科学的根拠に基づいたトレーニングメニューに関する教育を受けてきている、あるいはそれらの有資格者であることは少ない（中村浩也 2013）。本調査でも明らかになったように、指導経験の浅い指導者や競技経験がない指導者が指導している現状もある。先行研究（石郷岡ら 2017）でも、競技の専門性を考慮した適切な指導や頻発するスポーツ外傷などの対応について学んでいない指導者が部活動を指導している例が多いと報告されている。

しかし、スポーツ障害予防には、医療機関との連携の必要性や適切な医療機関選びの回答率は低く、質問紙調査作成にあたり事前インタビューを行った医師等から回答があった医療機関と学校、指導者の連携に関する意識に差がみられた。

なお、2022年5月～6月には、運動部員に対して、自らの外傷や障害、それらの予防対策についての理解や治療やリハビリの実施状況などの実態に関する調査を実施する予定である。

高校生を対象としたスポーツ外傷・障害予防教育の評価 — 知識・態度・行動の観点から —

山本順子 1), 西岡伸紀 2)

1) 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科, 2) 兵庫教育大学大学院学校教育学研究科

キーワード：運動部員, 実技講習, 実施時期, 振り返り学習, 整形外科医

【目的】

高校生を対象とした実習を伴う外傷・障害予防教育の有効性を明らかにするため, 知識, 意識や態度, 行動の変容を検証することを目的とした。

【方法】

1. 対象

高等学校4校に在籍する高校生, 運動部員714名(男子501名, 女子213名, A校231名, B校149名, C校174名, D校160名)を対象とした。

2. 予防教育

整形外科医と連携協働した予防教育を学校ごとに実施した。講義は, 50分間とし, 内容は, 筋疲労の評価, 消炎処置, ストレッチ, 筋力・体幹強化, コンディショニングとした。講師は, 整形外科医1名。実技講習は, 講義と同日に40分間実施した。内容は, アイシング, ストレッチ, 筋力・体幹強化とした。実技講師は, 整形外科医1名, 理学療法士2~3名。実施時期は, A, B校は1学期の夏季休業前, C, D校は2学期とした。B, C校には, 振り返り学習も実施した。内容は, 指導内容を理解し, 意識して行動しているかを確認するチェックシートを用いて, 各部で実施した。

3. 評価・分析方法

質問紙調査(27項目)を, 予防教育の前後(I~III期)に計3回実施した。各回の結果は, 個別に対応できる形式とした。結果は, 学校別, 性別ごとに比較分析した。質問紙項目については, 教育プログラムの指導内容別に, 筋疲労の評価, 消炎処置, ストレッチ, 筋力・体幹強化, コンディショニングに分け, 選択肢は, 「全くあてはまらない」を1点, 「あまりあてはまらない」2点, 「まあまああてはまる」3点, 「よくあてはまる」4点とした。さらに, 知識, 意識・態度, 行動別に得点を, 相関関係を踏まえたうえで合計し, 平均値の差について, 独立変数を学校と時期, 従属変数を指導内容別得点として, 混合型の二要因分散分析を, また, Bonferroni法による多重比較を行った。解析は, IBM SPSS Statistics Version26を用い, 有意水準は5%とした。

【結果】

1. 質問紙項目の相関関係

各指導内容の知識, 意識・態度, 行動別のSpearman

の順位相関係数は, 各々有意な正の相関が認められた($\rho = 0.14 \sim 0.81$, $p < .001$)。従って, 指導内容別に, 知識等別の合計得点を計算した。

2. 予防教育評価

二要因分散分析の結果, 交互作用が認められたのは, 女子の筋力・体幹強化(行動)のみであった($F(6.320) = 3.27$, $p = .004$)。単純主効果検定の結果, 得点の平均値は, B校: 時期III > 時期I, C校: 時期II > 時期Iであった(表1)。また, 時期Iにおいて, D, A校 > B, C校であった。

表1 単純主効果検定の結果: 時期

	II-I 期	III-I 期	III-II 期
A校	.457	.370	.077
B校	.213	.015 III > I	.163
C校	.001 II > I	.037	.268
D校	.821	.065	.070

主効果検定の結果は次のとおりであった。

- ① 筋疲労の評価: 【男子】(知識) 時期III > 時期I, A校 > B, D校。(行動) 時期II, III > 時期I。【女子】(知識) 時期III > 時期I, A校 > B, D, C校。(行動) 時期II, III > 時期I。D, A校 > C校。
- ② 消炎処置(知識): 【男子】時期II, III > 時期I。A校 > D校。【女子】時期II, III > 時期I。A校 > B, C校。
- ③ ストレッチ(行動): 【男子】時期II, III > 時期I。【女子】A, D校 > C校。
- ④ コンディショニング: 【男子】(意識・態度) 時期III > 時期I, II。【女子】(行動) A, D校 > C校。

【考察】

交互作用がほとんど認められず, 予防教育の実施時期や振り返り学習の効果は見られなかった。一方, 4校全体では, 男子では4内容で, 女子では2内容で時期の主効果が認められ, 教育後の方が教育前より平均値が概ね上昇し, 有効性が示された。予防教育の評価には, 教育の日常の活動での実施状況が大きく影響すると考えられ, 実施状況を含めた評価方法を検討する。

新型コロナウイルス感染症における養護教諭の現状について

地海和美
栗東市立大宝東小学校

キーワード：養護教諭，感染症

【目的】

新型コロナウイルス感染症（以下コロナ）の発生報道と共に学校一斉休校措置になり，教育現場は混乱を極めた。私たち養護教諭も，コロナ禍で保健室の機能や養護教諭の執務のあり方を模索した。

6月からは，「子どもたちの感染予防」という大きな課題の中，感染対策に基づき学校が再開した。コロナという経験したことのない感染症では，学校保健の中核を担う養護教諭は，児童生徒の健康状態の把握，健康管理，傷病者の対応等に大きな不安があった。

養護教諭自身が，他校の対応情報を得て執務や不安を共有することにより，自信を持って児童生徒への対応ができると考えた。

【方法】

期間：2021年2月～3月末

対象：当研究者の所属地域内に勤務する養護教諭
小学校52名，中学校26名，
県立学校13名，計91名

方法：グーグルフォームで回答

内容：コロナ発生以前と令和2年度末の状況について

1. 児童生徒への保健室対応
2. 養護教諭から見た児童生徒の様子
3. 養護教諭自身の執務や不安
4. 記述：備品や物品について
：よかったこと困ったこと

結果は，校種，学校規模，キャリアステージ（経験年数）などで集計し，記述内容については，文脈を損なわない程度に修正し分類した。

【結果】

1. 児童生徒への保健室対応

内科的や外科的対応の場所については，半数以上が場所を分けていなかった。保健室内の消毒は，対応後毎回実施が34.1%，1日に1回以上が85.7%であった。規模別，キャリアステージによる変化は見られなかった。

2. 養護教諭から見た児童生徒の様子

欠席者数は，「増加した」が小学校13.5%，中学校15.4%，県立学校30.8%であった。「減少した」が小学校で30.8%，中学校3.8%，県立学校15.4%であった。

欠席理由としては，校種の差なく「風邪症状」「腹痛」「発熱」「しんどい」が多かった。「念のため」も26.4%であった。

長期欠席者や行き渋りの児童生徒は，「増加した」が小学校44.2%，中学校19.2%，県立学校46.2%であった。

保健室への来室は，「増加した」が小学校9.6%，中学校11.5%，県立学校23.1%であった。「減少した」

は，小学校23.1%，中学校30.8%，県立学校30.8%であった。また，コロナ流行以前と比べて増えたと感じている来室理由は，「居場所として」が小学校36.5%，中学校23.1%，県立学校7.7%であった。

3. 養護教諭自身の執務や不安

養護教諭の執務については，「手洗い石鹸の補充」「消毒作業」「消毒計画」が70%以上，次いで「家庭からの健康観察」が増えていた。キャリアステージ16年未満より16年以上がすべての項目で増えていた。

学校再開時（20年6月）の不安は，「保健行事・健康診断の実施方法」，次いで「物品（消毒液やマスク）がない」「自分が感染源になること」だった。

調査時（21年2月）の不安は，「クラスターの発生」次いで「自分が感染源になること」だった。

学校再開時と調査時を比較すると，「情報量の少なさ」「物品の不足」が減少していた。

「クラスターの発生」「児童生徒のメンタルについて」「人権に関すること」は，変化が少なかった。キャリアステージ16年未満と16年以上を見たとき，16年以上は学校再開時からメンタルや人権についての不安を持っていることが示された。

【考察】

学校再開当初，「家庭での健康観察の徹底」「体調不良の児童生徒は経過観察を行わず帰宅」という指示が出ていたため，保健室来室者は，前年度より減ったのではないかと推測される。そのため，精神的要因での来室者にじっくり話を聞く対応は難しかった。また，感染への不安で欠席しても出席停止扱いになることが周知されていたため，普段から登校しにくい児童生徒にとっては，安心して休める期間になったと考えられる。これらのことから，長期欠席者や行き渋りの児童生徒が増加したと考えられる。

当初は，必要な物品が調達できない，情報量が少ないなど，不安要素が多かった。しかし，予算措置によって感染症対策関連物品の購入が図れ，健康管理，健康診断等を進めていくことができた。また，健康診断の実施については，学校医からの指導や協力を受けることができた。

養護教諭は，専門職として感染症対策に関する様々な執務が増え，キャリアステージ16年以上はさらに増加していた。また，児童生徒のメンタルや人権に関することは，アンケートを通して高かったことから，感染者や濃厚接触者が自責の念や不安に駆られることがないよう心身のケアを行うことも今後必要と考えられる。

経験のない手探り状態での感染予防対策は，養護教諭の心理的負担が大きく，複数配置や校内体制の整備など，感染予防対策を実施できる組織体制が必要と考える。

コロナ禍における不登校児支援に関する予備的考察 — 養護教諭のヒアリング調査を手がかりに —

八木利津子
桃山学院教育大学

キーワード：保健室登校，援助技術，養護教諭

【目的】

高年養護教諭が行ってきた保健室登校児童生徒への援助を手がかりに，保健室登校の援助技術について，主に「教育的要素スキル」「円環的スキル」「ペースをそろえる調整的スキル」の3観点から，養護教諭の望ましい対応や求められる能力を検討する。

【方法】

調査対象：各校種の養護教諭3名(経験歴30年以上)

追調査対象：フリースクールの教職員5名

調査期間：2021年1月～2022年9月

調査方法：高年養護教諭に対しては1年以上継続的に関わった保健室登校事例について半構造化インタビューを実施し，「教育的要素」「円環的要素」「調整的要素」スキルの3観点から，効果がみられた対応と効果がみられなかった対応等について計量テキスト分析をする。主な質問項目は①～⑥である。

①保健室登校児の対応経験の有無と人数 ②事例③苦労した事と根拠④対応時の留意点⑤支援計画・チーム支援⑥児童生徒や周囲の変容

さらに，フリースクールの教職員においては，個別アプローチの実態や多様なかわりについてヒアリング追調査を行い，「対応的視点(子ども理解)」「意図的視点」「思考的視点」にカテゴリー化して有効な対応について考察を加える。

【結果】

小学校(対応事例4件)：「腹痛」「母子分離不安」など

中学校(対応事例3件)：「聴覚過敏」「アトピー性皮膚炎の重症化」「集団不適應症状」など

高等学校(対応例3件)：「適應障害(神経性頻尿)」「不安神経症」「身体表現性障害」などの症例が述べられた。

養護教諭のヒアリング結果，「担任との役割分担を明確にして取り組むべきだった。」や「卒業後の視点から新しい生活に入る時に気を付けていくことまで様々な想定を行い確認すべきだった。」「保護者と共に様々な治療方法を模索した方が良かった」「保護者が進級時に支援学級に入級するか迷われている期間が長く特別支援への進路支援が不十分であった。」など長期的展望で先を見通した支援や具体的な家庭へのサポートにおよんでいる援助の実態や自

己省察する志向性がわかった。

「教育的要素スキル」においては，援助の留意事項の頻出コードが，小中学校の総抽出語135語，高等学校は146語がみられ，小中学校ではこまめに電話対応していたことや高等学校は安心な居場所づくりを意識した対応が把握できた。また，頻出語群から養護教諭の支援策は，〈安心〉に通じる志向傾向があった。これらのことから校種問わず養護教諭には，安心感をもたらす人間性が求められると示された。

「円環的要素スキル」では，小中学校の養護教諭は，苦労したことの頻出コードが総抽出語159語で，親を待つ姿勢で対応し時間に追われていた。組織連携を円滑に進めるために家族との懇談会を頻回に行い，保健室登校児が苦手としていた学校行事前に多くの行事と一緒に参加できるよう支援をしていた。高等学校では，特別支援の教諭に代わる役割を担っているものの家族への関わり頻度が小中より少なく，義務教育と高等教育の親との関わりの違いがみられた。

「ペースをそろえる調整的スキル」からは，小学校では対策会議が重視され，中学校では個別計画の立案を重視していたことがわかった。高等学校ではスクールカウンセラーとの支援体制づくりが肝要であることが最頻出コードの語群から読みとれた。

【考察】

不登校傾向児童生徒の対応で養護教諭に問われる「教育的要素スキル」は，当事者の課題や家族背景を見極める『観察力』と『判断力・対応力』に加えて，周囲を巻き込んで支援体制を整える『コーディネーター力』であると考えられる。「円環的スキル」の観点からは，学校保健の専門的立場から他教諭や保護者(家庭)との連携可能な『支援体制づくり』と時間的対応ができる『呼应力』が求められる。「調整的スキル」の観点からは，個に応じた指導計画の立案のために他職種間との調整が必要になることが示唆されており，会議に参画し発言できる『発信力』と『調整能力』が大きな意義をなすと考えられる。

さらに追調査からは，コロナ禍におけるフリースクールの活用頻度の高まりが益々予想され，養護教諭は，フリースクールへの橋渡し役をはじめ地域の学外機関との連携や情報共有の強化が求められるよう。

コロナ禍における非接触型レクリエーションの心理的効果 — 大学対面授業での試み —

高山昌子, 竹端佑介, 後和美朝
大阪国際大学

キーワード：大学生, レクリエーション実技, 二次元気分尺度, 運動の楽しさ

【目的】

2020年に流行が始まった新型コロナウイルス感染症拡大により, 学習環境が著しく変化し, 対面授業を主として実施してきた体育実技授業は今も影響を受けている. 文部科学省(2022)は, 新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言を踏まえた小学校, 中学校および高等学校における新型コロナウイルス感染症への対応に関する留意事項にて, 体育授業実施に際し, 「屋内で実施する際には呼気が激しくなるような運動を避けることを徹底すること」「呼気が激しくならない軽度な運動の際はマスクを着用すること」「なるべく個人で行う活動とし, 特定の少人数でも活動を実施する際は十分な距離を空けて行うこと」が示されている. 大学で実施している体育実技授業も例外なく留意事項を遵守して授業を展開しているが, これらの制限がかかる授業ではコミュニケーションを重視した活動が非常に難しい状況となっている. コミュニケーションを重視したレクリエーション実技は, ライフスキルや大学生活への適応感が向上するという報告もある(高山, 2014). また鞠子ら(2013)や石倉ら(2018)の研究からも体育実技授業によって良好な心理状態に変化し, 短期的にはその後の授業にも好影響を及ぼすことが報告されている.

そこで本研究では, レクリエーション授業を受講している学生を対象に, 非接触型のレクリエーション種目をを用いた授業を試み, 参加学生の心理的効果, 運動の楽しさ, 運動強度について調査することを目的とした.

【方法】

A大学においてレクリエーション授業を受講している学生のうち, 調査に協力が得られた46名(平均年齢: 19.93歳 \pm 0.83)を対象に, 非接触型レクリエーション実技を体験前と体験後に一斉に質問紙調査を配布し, 回答を求めた. 個人が特定されない等の倫理的配慮を行い, 2021年10月に実施した(15回授業の4回目). 心理尺度として, 二次元気分尺度(坂出, 2003), 実施種目の運動強度を図るため主観的運動強度(小野寺, 1973), 運動の楽しさ(徳永, 1980)を用いた. また実施種目に対しての感想を自由に記述してもらい, KJ法を用いて分析を行った. 二次元気分尺度の分析には対応のあるt検定を用いた. 統計学的処理にはIBM SPSS Statistis25を使用

し, 全ての有意水準は5%未満とした. 実施した種目は, 日本レクリエーション協会のチャレンジ・ザ・ゲームの一つである「ラダーゲッター」を用いた. この種目は個人で実施することも可能であるが, 他者とのコミュニケーションを図ることを授業の目的の一つとしていることから, チーム対抗戦で展開することとした.

【結果】

実施前と実施後の二次元気分尺度得点を比較したところ, 「活性度」は $-0.70 (\pm 3.61)$ から $3.87 (\pm 3.12)$ に上昇し, 有意な差を示した ($t(46)=8.16, p<0.001$). 「快適度」は $4.76 (\pm 3.56)$ から $4.93 (\pm 3.04)$ に上昇し, 有意な差を示した ($t(46)=5.51, p<0.001$). 「覚醒度」は $-5.00 (\pm 4.04)$ から $-0.89 (\pm 3.91)$ に上昇し有意な差を示した ($t(46)=8.26, p<0.001$). 「安定度」には有意な差はなかった. 二次元グラフ上の「休息に適したエリア」から「作業に適したエリア」に値が移動した.

主観的運動強度については, 「9」となり運動強度は低かった. 運動の楽しさは, 45点満点中36.78点 (± 6.17) だった. 運動の楽しさにおいて最も得点が高かったのは, 「運動の基本的欲求」因子であった. 最も得点が低かったのは, 「人間関係」「観戦・応援」因子だった. 自由記述からは, 「楽しい」「難しい」「難しいけど楽しい」「工夫」「競争・コミュニケーション」「誰でもできる」の6つのカテゴリーに分けることができた.

【考察】

本研究は, 非接触型レクリエーション活動の心理的効果について調査することであった. その結果, ラダーゲッターの実施前後において, 快適度並びに覚醒度が向上し, 気分の変化について二次元グラフ上の「休息に適したエリア」から「作業に適したエリア」に移行し, 運動強度が決して高くはないが, 活動によって良好な心理状態に向かうことが示唆された.

今回実施した「ラダーゲッター」は投げる・走るが中心の活動である. チーム対抗としたことから個人の運動強度は低くなったが, 自由記述から「他者とのコミュニケーションを図ることができた」「協力する競技なのでチーム力も深まるといった」「応援が盛り上がった」という閉塞感のある学生生活の中で少しでも他者との関わり会える機会となったことが示唆された.

第69回近畿学校保健学会役員等

会 長 高 野 知 行 びわこ学園医療福祉センター野洲
事務局長 伊 藤 徹 びわこ学園医療福祉センター野洲

運営委員（50音順）

井 上 匡 美 社会福祉法人びわこ学園
田 處 浩 壺 社会福祉法人びわこ学園
堀 田 智 宏 びわこ学園医療福祉センター野洲

主 催 近畿学校保健学会

後 援 滋賀県教育委員会
大津市教育委員会
滋賀県医師会
滋賀県歯科医師会
滋賀県薬剤師会

協 力 社会福祉法人びわこ学園
びわこ学園医療福祉センター野洲

近畿学校保健学会 開催地・学会長

回数	年次（西暦）	開催地	学会長	所 属
第1回	昭和29年（1954）	大 阪	伊東 祐一	大阪学芸大学
第2回	昭和30年（1955）	奈 良	伊東 祐一	奈良県立医科大学
第3回	昭和31年（1956）	滋 賀	伊良子光義	滋賀県教育委員会
第4回	昭和32年（1957）	和歌山	吉武 弥三	和歌山県立医科大学
第5回	昭和33年（1958）	京 都	川畑 愛義	京都大学
第6回	昭和34年（1959）	兵 庫	竹村 一	神戸大学
第7回	昭和35年（1960）	大 阪	富士 貞吉	大阪学芸大学
第8回	昭和36年（1961）	奈 良	岩田 正俊	奈良学芸大学
第9回	昭和37年（1962）	滋 賀	伊良子光義	滋賀県教育委員会
第10回	昭和38年（1963）	和歌山	小出 陽三	和歌山県教育委員会
第11回	昭和39年（1964）	京 都	川畑 愛義	京都大学
第12回	昭和40年（1965）	兵 庫	佐守 信男	神戸大学
第13回	昭和41年（1966）	大 阪	伊東 祐一	大阪学芸大学
第14回	昭和42年（1967）	奈 良	永井豊太郎	天理大学
第15回	昭和43年（1968）	滋 賀	大西 輝彦	滋賀県教育委員会
第16回	昭和44年（1969）	和歌山	白川 充	和歌山県立医科大学
第17回	昭和45年（1970）	京 都	米田 幸雄	京都教育大学
第18回	昭和46年（1971）	兵 庫	佐守 信男	神戸大学
第19回	昭和47年（1972）	大 阪	上林 久雄	大阪教育大学
第20回	昭和48年（1973）	奈 良	橘 重美	天理大学
第21回	昭和49年（1974）	滋 賀	山田 一	滋賀大学
第22回	昭和50年（1975）	和歌山	武田眞太郎	和歌山県立医科大学
第23回	昭和51年（1976）	京 都	山岡 誠一	京都教育大学
第24回	昭和52年（1977）	兵 庫	美崎 教正	神戸大学
第25回	昭和53年（1978）	大 阪	安藤 格	大阪教育大学
第26回	昭和54年（1979）	奈 良	出口 庄祐	奈良女子大学
第27回	昭和55年（1980）	滋 賀	宮田 栄子	滋賀大学
第28回	昭和56年（1981）	和歌山	武田眞太郎	和歌山県立医科大学
第29回	昭和57年（1982）	京 都	北村 李軒	京都大学
第30回	昭和58年（1983）	兵 庫	山城 正之	神戸大学
第31回	昭和59年（1984）	大 阪	後藤 英二	大阪教育大学
第32回	昭和60年（1985）	奈 良	中牟田正幸	奈良教育大学
第33回	昭和61年（1986）	滋 賀	林 正	滋賀大学
第34回	昭和62年（1987）	和歌山	松岡 勇二	和歌山大学
第35回	昭和63年（1988）	京 都	金井 秀子	京都教育大学

回数	年次（西暦）	開催地	学会長	所 属
第36回	平成元年（1989）	兵 庫	住野 公昭	神戸大学
第37回	平成2年（1990）	大 阪	大山 良徳	大阪大学
第38回	平成3年（1991）	奈 良	河瀬 雅夫	天理大学
第39回	平成4年（1992）	滋 賀	林 正	滋賀大学
第40回	平成5年（1993）	和歌山	猪尾 和弘	和歌山大学
第41回	平成6年（1994）	京 都	八木 保	京都大学
第42回	平成7年（1995）	兵 庫	勝野 眞吾	兵庫教育大学
第43回	平成8年（1996）	大 阪	一色 玄	大阪市立大学
第44回	平成9年（1997）	奈 良	山本 公弘	奈良女子大学
第45回	平成10年（1998）	滋 賀	大矢 紀昭	滋賀医科大学
第46回	平成11年（1999）	和歌山	宮下 和久	和歌山県立医科大学
第47回	平成12年（2000）	京 都	寺田 光世	京都教育大学
第48回	平成13年（2001）	兵 庫	三野 耕	兵庫教育大学
第49回	平成14年（2002）	大 阪	堀内 康生	大阪教育大学
第50回	平成15年（2003）	奈 良	北村 陽英	奈良教育大学
第51回	平成16年（2004）	滋 賀	大矢 紀昭	滋賀医科大学
第52回	平成17年（2005）	和歌山	宮西 照夫	和歌山大学
第53回	平成18年（2006）	京 都	津田 謹輔	京都大学
第54回	平成19年（2007）	兵 庫	石川 哲也	神戸大学
第55回	平成20年（2008）	大 阪	白石 龍生	大阪教育大学
第56回	平成21年（2009）	奈 良	辻井 啓之	奈良教育大学
第57回	平成22年（2010）	滋 賀	中川 雅生	滋賀医科大学
第58回	平成23年（2011）	和歌山	森岡 郁晴	和歌山県立医科大学
第59回	平成24年（2012）	京 都	井上 文夫	京都教育大学
第60回	平成25年（2013）	兵 庫	鬼頭 英明	兵庫教育大学
第61回	平成26年（2014）	大 阪	平田 まり	関西福祉科学大学
第62回	平成27年（2015）	奈 良	高橋 裕子	奈良女子大学
第63回	平成28年（2016）	滋 賀	高野 知行	滋賀医科大学
第64回	平成29年（2017）	和歌山	内海みよ子	和歌山県立医科大学
第65回	平成30年（2018）	京 都	小谷 裕実	京都教育大学
第66回	令和元年（2019）	兵 庫	大平 曜子	兵庫大学
第67回	令和2年（2020）	大 阪	楠本久美子	四天王寺大学
第68回	令和3年（2021）	奈 良	高田恵美子	畿央大学
第69回	令和4年（2022）	滋 賀	高野 知行	びわこ学園医療福祉センター野洲

